

二条東院構想試論（上）

平 沢 竜 介

一

二十八歳の夏、光源氏は明石から京に召還される。翌年の二月、朱雀帝が讓位し冷泉帝が即位すると、源氏は内大臣に任命され、それ以降源氏を中心とする政治体制が着々と整備されていく。そのような状況の中、源氏は二条東院の造営を思い立つ。^注

二条院にも同じごと待ちきこえける人を、あはれなるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将、中務やうの人々にはほどほどにつけつつ情を見えたまふに、御暇なく外歩きもしたまはず。二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど思しあててつくろはせたまふ。

（濔標(2)二八四—二八五）

政権の中枢に復帰した源氏は、様々な女性達のもとへ外歩きをする暇も無くなったので、離れて暮らす花散里など、かつて関係のあった女性達を身近に置きたいと思ひ、二条院の東の故桐壺院の御殿の改築に取りかかる。

源氏が二条東院の造営を思い立った日付は、正確には知ることができないが、右に引用した文章の直前に「同じ

一

月（二月）の二十余日、御国譲りのことにはかなれば」とあり、引用した文章の直後に懐妊した明石の君の様子を探るため明石に使いを遣わした時期が「三月朔日のほど」とあることからすると、二月二十余日から三月朔日の間ということになるうか。

引用した箇所では「花散里などやうの心苦しき人々住ませむ」と、二条東院に住まわせる人々の筆頭に花散里が挙げられているが、源氏の脳裏には流離の地で再会を誓った明石の君も二条東院の住人として予定されていたと想像される。事実、物語は二条東院の造営が始められたことを告げた後、次のように語り続ける。

まことや、かの明石に心苦しげなりしことはいかにと申し忘るる時なれば、公私いそがしき紛れにえ思すまにもとぶらひたまはざりけるを、三月朔日のほど、このころやと思しやるに人知れずあはれにて、御使ありけり。とく帰り参りて、「十六日になむ。女にてたひらかにものしたまふ」と告げきこゆ。めづらしきさまにてさへあなるを思すにおろかならず。などで京に迎へてかかることをもせさせざりけむと口惜しう思さる。

宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勸へ申したりしこと、さしてかなふめり。おほかた、上なき位にのほり世をまつりごちたまふべきこと、さばかり賢かりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみな思し消ちつるを、当帝のかく位にかなひたまひぬることを思ひのごとうれしと思す。みづからも、もて離れたまへる筋は、さらにあるまじきことと思す。あまたの皇子たちの中ですぐれてらうたきものに思したりしかど、ただ人に思しおきてける御心を思ふに、宿世遠かりけり、内裏のかくておはしますを、あらはに人の知ることならねど、相人の言空しからず、と御心の中に思しけり。いま行く末のあらましごとを思すに、住吉の神のしるべ、まことにかの人

も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしこき筋にもなるべき人のあやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな、このほど過ぐして迎へてん、と思して、東の院急ぎ造らすべきよしもよほし仰せたまふ。(滯標(2)二八五―二八六)

「まことや、かの明石に心苦しげなりしことはいかにと申し忘るる時なれば」という表現からは、帰京後の源氏の心に明石の君への思いが消えることがなかつたことが窺われる。さらに、二条東院の造営を思い立った直後の三月初旬、源氏は明石の君が女子を出産したことを知らされる。源氏は、多くの相人達が自らを「上なき位にのほり世をまつりごちたまふ」と予言していたことが実現したこと、かつて宿曜によつてなされた「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」という予言も実現可能と思われるようになり、かつ源氏と明石の君との出逢いが住吉の神の導きであったことなどを思い合わせると、明石の君との間に生まれた女子が将来后となるであろうことを確信する。明石の君の出産を聞いた直後の「なとて京に迎へてかかることをもせさせざりけむと口惜しう思さる」という表現は、将来后となるであろう明石の姫君を明石という片田舎で出産させてしまったことに対する源氏の後悔の念の表出であろうし、「東の院急ぎ造らすべきよしもよほし仰せたまふ」という表現は、明石の君とその姫君を出来るだけ早く都に迎え入れようとする意志の現れといえよう。

明石での別れに際しての再会の誓い、帰京後の明石の君への思い、また明石の君の出産を聞いた直後の「なとて京に迎へてかかることをもせさせざりけむと口惜しう思さる」「東の院急ぎ造らすべきよしもよほし仰せたまふ」といった表現を勘案すると、明石の君を二条東院に迎え入れようとする源氏の思惑は既に二条東院の造営を思い立

つ時点で存在したと想像される。

ただし、後に二条東院に引き取られることになる末摘花は、二条東院の造営開始時にはその入居は予定されていなかった。源氏が末摘花との再会を果たすのは、都に召還された翌年、源氏二十九歳の四月のことであるが、その時の様子は蓬生巻で次のように語られる。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨すこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。昔の御歩き思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。

大きな松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかたりなり。橘にはかはりてをかしければさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。いとあはれにておしとどめさせたまふ。例の、惟光はかかる御忍び歩きに後れねばさぶらひけり。召し寄せて、「ここは常陸の宮ぞかしな」、「しかはべる」と聞こゆ。「ここにありし人はまだやながむらん。とぶらふべきを、わざとものせむもところせし。かかるついでに入りて消息せよ。よくたづね寄りてをうち出でよ。人違へしてはをこならむ」とのたまふ。

(蓬生(2)三四四—三四五)

源氏は花散里のもとを訪ねる途次、偶然末摘花の邸の傍らを通りかかる。大きな松に垂れ下がっている藤の香りに誘われて、牛車から顔を出すとそこは末摘花の邸であった。「はやうこの宮なりけり」という表現から、この発見

は偶然のものであったことが理解されよう。また、源氏が末摘花がまだこの邸に住んでいるかと訝っていることからも、須磨、明石に流離していた間、源氏と末摘花の間に何の連絡も無かったことが確認される。とすると、二条東院の造営を思い立った時、源氏の脳裏に末摘花を二条東院に引き取ろうとする意識はなかったということになる。

一方、源氏が二条東院の造営を思い立った年の五月、源氏が再び花散里の邸を訪れるという場面が語られた後、かやうのついでにも、かの五節を思し忘れず、また見てしがなと心にかけてたまへれど、いと難きことにて、え紛れたまはず。女、もの思ひ絶えぬを、親はよろづに思ひ言ふこともあれど、世に経んことを思ひ絶えたり。心やすき殿造りしては、かやうの人集へても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にもと思す。かの院の造りさま、なかなか見どころ多くいまめいたり。よしある受領などを選びて、あてあてにもよほしたまふ。

(濔標(2)二九九)

という叙述がなされる。ここに登場する「かの五節」とは、物語では筑紫の五節と呼ばれる女性である。源氏が須磨に退去する直前、自らの援助によって慎ましかな暮らしをしている麗景殿の女御とその妹の邸を訪れる途次、かつて一度だけ逢った中川の女の邸の前を通りかかり惟光を遣わすが、女は相手が源氏と知りながらわざとそしらぬ素振りを装って源氏との関係を拒むという場面が描かれた折に、彼女は源氏にとって忘れがたい女性として、かやうの際に、筑紫の五節がらうたげなりしはや、とまづ思し出づ。

(花散里(2)一五五)

という一文で初めて物語の舞台に登場する。この文章から、筑紫の五節は中川の女と同等の身分で、筑紫の国と何らかの関係があり、かつ五節の舞姫に選ばれ、源氏とかりそめの逢瀬を交わしたことがあることが推測されるが、

その源氏との逢瀬はそれ以前の物語には描かれていない。彼女は須磨巻で筑紫から上京する際、須磨にいる源氏と歌を交わし、明石巻では、

かの帥のむすめの五節、あいなく人知れぬもの思ひさめぬる心地して、まくなぎつくらせてさし置かせけり。
須磨の浦に心をよせし舟人のやがて朽たせる袖を見せばや

手などこよなくまさりにけり、と見おほせたまひて、遣はす。

かへりてはかごとやせまし寄せたりしなごりに袖のひがたかりしを

飽かずをかしと思ししなごりなれば、おどろかされたまひていとど思し出づれど、このごろはさやうの御ふるまひさらにつつみたまふめり。花散里などにも、ただ御消息などばかりにておほつかなく、なかなか恨めしげなり。
(明石(2)二七五—二七六)

と、帰京した源氏と歌を取り交わす。

それに続いて登場するのが、先に引用した濡標巻の場面ということになるが、そこでは筑紫の五節は源氏への思いを断ち切れず、親の勧める縁談にも耳を貸さないと記され、あの中川の女と同様の立場にありながら、それとは対照的に源氏への思いを頑ななまでに貫く姿勢を見せる女性として描かれる^{註2}。源氏も帰京後、五節を「また見てしかな」と思うが、なかなか逢うことはかなわない。二条東院の造営を思い立った二月の時点から三ヶ月ほど過ぎたこの五月の時点で、源氏は改めて「心やすき殿造り」すなわち二条東院を造営して、思い通りに養育したい子供などができた時、その後身役として筑紫の五節を二条東院に住ませようとする。この表現にのみ着目すると、源氏が筑紫の五節を二条東院に入居させようと思ひ立ったのはこの五月の時点ということになるが、筑紫の五節が源

氏とのかりそめの逢瀬以来、一途に源氏を恋慕っており、源氏もそうした筑紫の五節を憎からず思っていることを考慮すると、筑紫の五節は源氏が二条東院の造営を思い立つ動機、すなわち「花散里などやうの心苦しき人々住ませむ」という動機の「心苦しき人々」の一人と考えられていたであろうことは十分想像される。二条東院造営開始時における源氏と筑紫の五節の関係を考えるなら、筑紫の五節は源氏が二条東院の造営を思い立つた時点で、二条東院に住ませようとしていた人々の中の一人であったと考えるのが穏当であろう。

また、後に二条東院に迎え入れられることになる空蟬も、二条東院の造営が開始された時点では夫とともに東国に下っており、源氏と再会を果たすのは源氏二十九歳、関屋巻においてであり、夫を亡くするのはその後のこととなるから、二条東院造の造営を思い立つた時点では、源氏は空蟬を二条東院に迎え入れることを考えていなかったであろう。

以上、二条東院の造営とそこに入居すると思われる女性達について、物語に描かれた源氏の意識に即して検討してきたが、源氏が「花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど思しあててつくりはせたまふ」と二条東院の造営を思い立つた時、二条東院に入ることが予定されていたのは、花散里の他には明石の君と筑紫の五節ぐらいで、松風巻の二条東院完成時以後に移り住んだ末摘花や空蟬は、源氏が二条東院の造営を思い立つ時点では、未だ源氏との再会を果たしておらず、源氏の脳裏には彼女たちを二条東院に住ませようとする意図はなかったということになる。

二

ただし、こうした読みはあくまでも物語の中に存在する光源氏という人物の意識のあり方に即した読みであって、

物語作者の意図は別の所にあつたと考えるのが至当であろう。物語作者は、源氏が二条東院の造営を思い立つことを語り始める以前に、二条東院がどのような建物であり、二条院、二条東院のそれぞれの殿舎にどのような人物が入るかということを周到に構想していたと想像される。しかし、それら二条院、二条東院に入る人物全てを源氏の前に登場させてから二条東院の造営開始を語り始めるのでは、いたづらに物語の時間を長引かせ、作品を冗長なものとするのが危惧されたが故に、物語作者は二条東院の造営開始後に、当初から予定していた入居者の登場を語るという手法を選択したのであろう。

では、物語作者は二条東院の完成した際に、二条院、二条東院のどの殿舎にどのような人物が入居すると想定していたのであろうか。この問題を考える際参考となるのは、二条東院完成時以降に二条院、二条東院に入居しないし入居することが予定されている人物を見ていくことで明らかにならう。

まず、二条院の東の対には源氏、西の対には紫の上が住む。また、二条東院が完成した時の様子を記した松風巻冒頭の部分では

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対はことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありてこまかなり。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さる方なる御しつらいどもしおかせたまへり。

(松風(2)三九七)

と二条東院が完成し、それに伴ってそこに移り住む人々とその殿舎が紹介される。それによると、二条東院の西の

対には花散里、東の対には明石の君が住むことが予定されている。

また蓬生巻末尾部分では、

二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。対面したまふことなどはいと難けれど、近き標のほどにて、おほかたにも渡りたまふに、さしのぢきなどしたまひつつ、いと侮らはしげにもてなしきこえたまはず。

(蓬生巻(2)三五五)

と記され、末摘花が二条東院に入居したことが知られる。また、空蟬も関屋巻巻末で出家したことが語られ、玉鬘巻で二条東院の北の対に住んでいることが確認される。末摘花や出家した空蟬は源氏からの愛情という面では花散里や明石の君に劣るとしても、いずれも源氏にとつて忘れがたい女性であり、既に滯標巻で「二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど思しあててつくるはせたまふ」と語られた時点で、二条東院に入居することが予定されていたと想像される。二条東院の西の対に花散里、東の対に明石の君が入居することは二条東院の造営を語り始める時点で決められていたであろうから、末摘花や空蟬は二条東院のそれ以外の場所、すなわち北の対に入居することが予定されていたのであろう。先に引用した松風巻冒頭部分で、二条東院の北の対を「北の対はことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるも」と二条東院の北の対に複数の女性が入居ことを記されているのも、二条東院の北の対に末摘花と空蟬という二人の女性を入居させることを念頭においての措置と考えられる。

ただし二条東院が完成した後、明石の君は明石から大堰の山荘に移り住むこととなり、以後二条東院に入らず、

それから四年後源氏が新たに六条院を造営したのを機に、大堰の山荘から六条院に移り住むことになる。従って、松風巻冒頭に記された源氏の思惑は実現することなく終わるのであるが、その松風巻の冒頭部分で示された人物の配置と北の対を「かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに」するとう表現、及びその後の物語で二条東院の北の対に移り住むことになった人物を勘案すると、物語作者は二条東院の造営を構想した当初は、二条東院の東の対に明石の君、西の対に花散里、北の対に末摘花、空蟬を住まわせることを予定していたと想像される。

また、もし仮に明石の君が大堰に移らず、二条東院の東の対に入っていたとしても、彼女と源氏との間に生まれた明石の姫君は、二条院の西の対に住む紫の上のもとに養女として迎え入れられることが予定されていたであろう。既に拙稿でも指摘したように、『源氏物語』は若紫巻執筆時点で、紫の上が東、山、仏、明石の君が西、海、南を象し、この二人の女性を娶ることが源氏の国土支配の正当性を示す根拠となると措定されている以上、明石の君は紫の上と同等の重みを持つて物語の中に定位される必要がある^{注3}。紫の上が源氏との絶対の愛で結ばれるとするなら、紫の上と同等の重みを持つ明石の君もその絶対の愛に相当する何かを与えられなければならない。とすればそれは、明石の君の娘である明石の姫君が、紫の上の養女となり、入内して皇后となり、将来天皇となる皇子を生むという、松風巻以降の物語の展開を考える他ない。

さらに、筑紫の五節も先に引用した「思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にもと思す」(濔標(2)二九九)という記述から、二条東院に入ることが予定されていたはずである。また、この「思ふさまにかしづきたまふべき人」が誰かについては、右に引用した濔標巻の記事の少し前の部分に「宿曜に「御

子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勸へ申したりしこと、さしてかなふめり」とあることからすると、源氏の子供とは考えがたい。源氏には、この滯標巻の記事が書かれた時点で既に夕霧、冷泉帝、明石の姫君の三人の子供がおり、源氏は宿曜の言葉を信じて明石の姫君を都に引き取ろうと考えているのであるから、この「思ふさまにかけづきたまふべき人」が源氏の子供でないことは明らかである。とすれば、五節が後見する子は養女と想定するのが妥当であろう。^{注4}

筑紫の五節が養女として「かしづく」養女の候補としては、まず六条御息所の娘である秋好中宮が挙げられよう。だが、伊井春樹は「秋好中宮の場合は二条院の方に引き取り、「語らい聞えて過ぐい給はむに、いとよき程なるあはひならむ」(滯標)と紫の上にその世話を託していること、また紫の上は「嬉しき事に思して御わたりの事をいそぎ」(同)、また「かしこ(紫上)には、年経ぬれどかかる人もなきがさうざうしく覚ゆるままに、前の齋宮のおとなびものし給ふをだにこそ、あながちに扱ひ聞ゆめれば」(薄雲二・三〇四頁)と、秋好中宮に対して親のように振舞っていることを指摘して、「これでは五節など入り込む余地などまったたくあるはずがない」「后がねの女性であるからには、五節のような受領階級の娘には秋好中宮を後見させるわけにはいかない」として、五節が後見する女子が秋好中宮であることを否定し、さらに

光源氏は朱雀院への気がねから、「二条の院に渡し奉らむ事をもこの度は思しとま」(絵合二・二六四頁)つたが、その裏では着々と計画を進行させている。二条院へ迎え自邸から入内させたいと願ったことは、世間にはつきりと光源氏の養女であることを公言し、秋好中宮に一層の重みを与えようと意図したものである。しかし、朱雀院との関係からさすがにそこまでは踏み切れなかった。二条院に引き取り、光源氏が公然と親さま

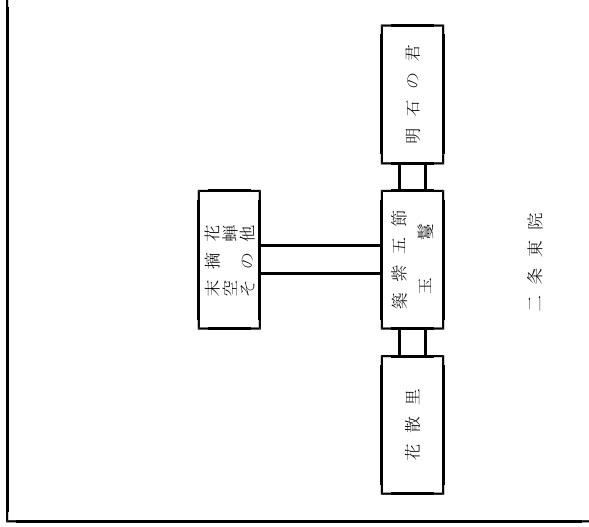
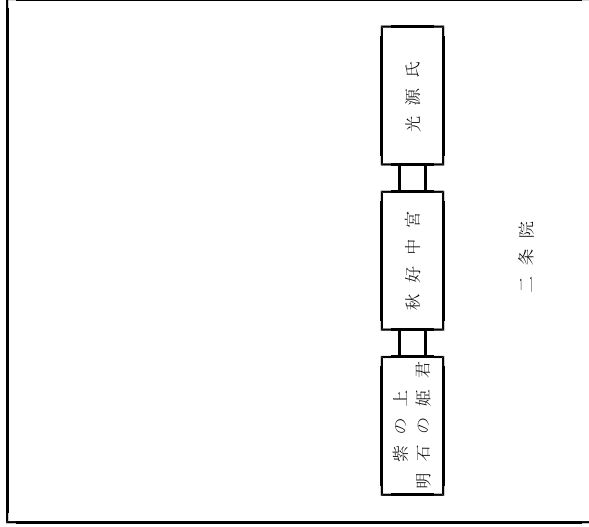
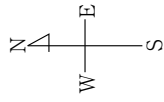
に振る舞うようになるのは、入内させて既成事実を造りあげて後になってからである。

と指摘する。^{注5}薄雲巻に「秋ごろ、二条院にまかてたまへり。寢殿の御しつらいいと輝くばかりしたまひて、今は、今はむげの親さまにもてなし扱ひきこえたまふ」とあるように、源氏は入内後、秋好中宮を二条院の寢殿に引き取り親のように振る舞っている。もし二条院、二条東院が当初計画していた通りに完成したとしたら、秋好中宮は里下りの折には、二条院の寢殿に住むことになっていたと想像される。^{注6}

また先に指摘したように、濡標巻で源氏が筑紫の五節を思い出した折の「心やすき殿造りしては、かやうの人集へても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にもと思す」（濡標(2)二九九）という感懐は、二条東院を造営し、そこに筑紫の五節を住ませ、しかるべき養女の後見をさせようとしたものと理解するのが妥当であろう。とすると、二条東院にも源氏の養女となるべき娘が入ることが予定されていたことになる。二条院に養女として秋好中宮を住まわせることが予定されていたとすると、二条東院には物語で秋好中宮と対照的な存在として描かれてきた玉鬘が養女として入居することが予想される。^{注7}

とすると、二条東院において、筑紫の五節と玉鬘の住む場所はどこになるのか。日向一雅は「源氏にとって秋好の入内が六条御息所の遺言に應える事であったように、玉鬘を後見することも横死させた夕顔の鎮魂のため必要であった」とし、「このような二人の一方が二条院寢殿に入ったとすれば、他方が二条東院寢殿に入ることは十分な理由があった」とする。^{注8}後に見るように二条東院構想では、対称性を重んじる人物配置が取られていることを考慮すると、玉鬘が二条東院の寢殿に入るといふ日向の指摘は妥当なものと言えよう。

以上述べてきた二条東院構想における二条院、二条東院の人物配置を図示すると次のようになる。



二条東院の構想が思い描かれた時、物語作者の脳裏には右に示した図とほぼ同様の構図が出来上がっていたと推測される。ところで、二条院に二条東院を付け加えて成立した空間（本稿ではこれ以降、この空間を二条院・二条東院空間と呼ぶ）に、図に示したように女性たちを配置するということは、どのような意味を持つのであろうか。

源氏が二条東院の造営を思い立った時の様子は次のように記されていた。

二条院にも同じごと待ちきこえける人を、あはれなるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将、中務やうの人々にはほどほどにつけつつ情を見えたまふに、御暇なくて外歩きもしたまはず。二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど思しあててつくろはせたまふ。

（滯標(2)二八四—二八五）

この記述によると、二条東院は源氏が自ら外歩きをする暇が無くなったため、二条院から離れて暮らすかつて関係のあった女性たちで、かつ源氏の須磨、明石への流離といった辛い境遇の中でも源氏への思いを変えることのなかった女性たちを全員一つの場所に集めようと意図して造営が始められたということになる。

とすると、二条東院に住む人と二条院に住む人との間には、自ずから格の相違が生じてくる。二条院の東の対に住む源氏と西の対に住む紫の上は、物語の中心的存在であり、最も重みのある存在である。寝殿に迎え入れられる秋好中宮は、二条院完成時には冷泉帝の後宮で筆頭格の女御であり、少女巻で中宮となる。紫の上に養女として引き取られた明石の姫君は、后がねの姫君として養育されるのであり、後に今上帝の中宮となる。このように、二条院に暮らす人々は物語の中で主人公、または最高の位に就く人々であり、物語において最上級の格を備えた人々と

いうことができよう。

それに対し、二条東院の西の対に住む花散里は麗景殿の女御の妹であり、身分としては上の品に属するが、源氏からの愛情は紫の上にはもちろんのこと、東の対に住む明石の君に比べても劣っている。また、明石の君は、源氏から深く愛されてはいるが、播磨国の国守となり、その後播磨国に住み着いた明石の入道の娘であり、身分としては花散里や末摘花に著しく劣っている。花散里と明石の君の二人は、身分、源氏からの愛情という観点から見た場合、どちらか一方は優れているが、もう一方では劣っている女性ということになる。

北の対に住む人々は、

北の対はことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありてこまかなり。

(松風(2)三九七)

と記されるように、源氏とかりそめの交渉を持ち、将来を約束した女性達が集められている。これらの女性達の中で、名前が分かるのは末摘花と空蟬である。末摘花は常陸の宮の娘で、身分の上では優れているが、容貌が醜く、性格も頑なで古風な面ばかり目立ち、源氏からの愛情は薄い。源氏の末摘花の境遇を憐れんで生活を援助しているに過ぎない。花散里がその控え目で穏やかな性格故、源氏の気の置けない話し相手として寓されているのと比較すると、末摘花に対するの源氏の対応は格段に劣っている。また空蟬は、伊予介の後妻となったことで中流階級に転落した女性である。明石の君に比べれば身分的には格上となるが、源氏からの愛情は明石の君に劣っており、容貌も取り立てて優れておらず、二条東院に入居した時には既に出家している。以上の点から末摘花や空蟬は、源氏が

「かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々」の中に入るべき存在として、二条東院の北の対に入れられることになったのであろう。寝殿に入居することが想定されていた玉鬘も、頭の中將と夕顔の間に生まれた娘であり、最終的には髭黒の妻となるが、前坊を六条御息所のために生まれた秋好中宮と比較すれば、血筋は明らかに劣っていると云わざるをえない。

源氏と紫の上の絶対的な愛を描くためには、紫の上と源氏と関係を持つ他の女性たちの間には、あきらかな区別を設けねばならなかった。そのため、物語作者は紫の上以外の女性たちを源氏の住む二条院に入居させえなかった。物語作者は二条院の近くに新しい邸を作ることによって、源氏の近くに源氏と関係を持つ女性たちを住まわせることを可能にしたのである。紫の上の他に二条院に住むことが許された女性は、源氏と紫の上の養女となる秋好中宮と明石の姫君のみであった。

※

また、二条院・二条東院空間に住まう女性のうち、紫の上、明石の君、花散里、末摘花の四人には、それぞれに春・夏・秋・冬の四つの季節と東・西・南・北の四つの方位が割り当てられている。

若紫巻冒頭、瘡病を患った源氏が加持を受けるため北山の聖のもとを訪れたのは、「三月つごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば」(若紫一九九—二〇〇)と記される春の終わり、山の桜の盛りの時期である。源氏はこの北山で紫の上を見出すことになるのであり、紫の上が物語に登場する季節は春である。北山は桜の花盛りであり、幼い紫の上はその桜に喩えられ、それ以降の物語でも終始一貫して桜の花に喩えられる。紫の上は春という季節と分かちがたく結びつけら

れている。また、北山で見出された紫の上であるが、彼女が春という季節と強い結びつきを持つということは、五行思想からすれば、東という方位と結びつくことを意味する。さらに、既に拙稿において指摘した、東と西の水平軸、山と海の垂直軸の二元による国土支配という枠組みにおいて、彼女に東という属性が賦与されていた事実を勘案するならば、紫の上と春、東の結びつきはより明らかに認められよう。^{注9}

末摘花も源氏が北山で紫の上を見出した年に、源氏と巡り合うことになる女性であるが、東と西の水平軸、山と海の垂直軸の二元による国土支配という観点から見ると、紫の上がコノハナサクヤビメに比定されるのに対し、末摘花はイワナガヒメに比定され、紫の上と同様、東、山、仏という属性を賦与され、方位としては東という属性を与えられる。^{注10}

しかし、その一方で彼女には冬という属性が賦与される。源氏が末摘花の異様な容貌を初めて見たのは、雪の降りしきる夜、末摘花と二度目の逢瀬を遂げた、その翌朝であった。

からうじて明けぬる気色なれば、格子手づから上げたまひて、前の前栽の雪を見たまふ。踏みあけたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、「をかしきほどの空も見たまへ。つきせぬ御心の隔てこそわりなけれ」と恨みきこえたまふ。まだほの暗けれど、雪の光に、いとどきよらに若う見えたまふを、老人ども笑みさかえて見たてまつる。「はや出でさせたまへ。あぢきなし。心うつくしきこそ」など教へきこゆれば、さすがに、人の聞こゆることをえいなびたまはぬ御心にて、とかうひきつくるひて、ゐざり出でたまへり。見ぬやうにて外の方をながめたまへれど、後目はただならず、いかにぞ、うちとけまさりのいささかもあらばうれしからむと思すも、あながちなる御心なりや。

まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおほゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかうたてあり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらばひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣の上まで見ゆ。何に残りなう見あらはしつらむと思ふものから、めずらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ。頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、袿の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ。

(末摘花(1)二九二—二九三)

蓬生巻でも、源氏と再会を果たす直前の場面に

霜月ばかりになれば、雪、霰がちにて、外には消ゆる間もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬、葎の蔭に深う積もりて、越の白山思ひやらるる雪の中に、出で入る下人だになくて、つれづれとながめたまふ。はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳の中もかたはらさびしくもの悲しく思さる。

かの殿には、めづらし人に、いとどもの騒がしき御ありさまにて、いとやむごとなく思されぬ所どころにはわざともえ訪れたまはず。まして、その人はまだ世にやおはすらむとばかり思し出づるをりもあれど、たづねたまふべき御心ざしも急がであり経るに、年かはりぬ。

(蓬生(2)三四三—三四四)

という記述がある。末摘花が初めて源氏に自らの容貌を見られた朝、また、源氏が明石から帰京した約一年後、源

氏と再会を果たす直前の彼女にとつてきわめて重要な場面で、他の女性達が登場する場面ではほとんど見られないこのない冬、しかも雪の場面が設定されていることも注目される。

さらに、末摘花を象徴する植物として松が描かれることも注目されよう。末摘花と源氏の最初の逢瀬の場面では、八月二十余日、宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへのこと語り出でてうち泣きなどしたまふ。いとよきをりかなと思ひて、御消息や聞こえつらむ、例のいと忍びておはしたり。

(末摘花(1)二七九)

と松が描かれ、また、源氏が末摘花の醜い容姿をはつきりと目撃した後、末摘花の邸を後にする場面では、

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろほひて、夜目にこそ、しるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降りつめる、山里の心地してものはれなるを

(末摘花(1)二九五)

とあり、それに続いて、

橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおれ起きかへりてさところばるる雪も、名にたつ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがなと見たまふ。

(末摘花(1)二九六)

という叙述がなされる。末摘花巻でも、源氏と再開を果たす契機となったのは、末摘花の邸の松の枝に垂れ下がって咲いている藤の花であったし、末摘花と再会を果たした源氏が末摘花の邸を出て行く際にも松の木が描かれた後、源氏と末摘花は「松」に「待つ」を掛けた歌を贈答する。『源氏物語』が書かれた当時、松は常緑の植物を代表し、

冬を象徴する景物と考えられていた。

以上、末摘花と雪や松という冬の景物の結びつきを考えると、末摘花は、東、山、仏という属性を有する一方で、冬という属性も賦与されていたと考えられる。また、冬という季節は、五行思想では方位は北に当たる。先に末摘花は東という属性を有するとしたが、だとすると、末摘花は冬という季節の他に、東と北の二つの方位を表象することになる。

明石の君は、若紫巻で源氏の供人の一人である良清の語りによって物語に初めて登場する。明石の君が住むのは都から遠く離れた西方の明石の浦であり、彼女はこのことより西という属性を賦与されていると考えられる。彼女が源氏と初めて逢瀬を持ったのは秋であり、彼女が明石から都に上ることを決意し、大堰に移り住んだのも秋である。これら彼女にとって重要な意味を持つ出来事が秋になされていることは、彼女が秋という属性を有していることを想定させる。また、西という方位は五行思想では秋を表すから、これらのことより、明石の君は西、秋を表象する存在と見なすことができよう。

花散里は、花散里巻で初めて物語に登場する。花散里巻は、源氏二十五歳の夏、五月雨の晴れ間に、源氏が麗景殿の女御とその妹の三の君を訪ねる様が語られる極めて短い巻であるが、そこには、五月雨、郭公、橋といった夏の代表的景物に彩られた一日が描かれており、それによって花散里に夏という属性が与えられていると読み取ることができよう。また、物語で彼女が花散里と呼ばれるのは、源氏が麗景殿の女御を訪ねた際、庭に咲いていた橘の花に由来するが、その橘の花に因んだ名で呼ばれていることも、彼女が夏という季節に結びつけられていることを示しているよう。花散里にどのような方位が賦与されているのか、物語の記述から直接窺い知ることはできないが、

五行思想で夏は南に当たることから、南という属性を賦与されていると考えるのが自然であろう。

以上の検討より、二条院・二条東院空間は、二条東院の東に西、秋を表象する明石の君、二条院の西に東、春を表象する紫の上を配し、二条東院の北の対に東、北、冬を表象する末摘花、西の対に南、夏を表象する花散里を配する形で構想されていたと推定することができよう。

先にも述べた通り、末摘花は源氏からの愛情が紫の上より劣っていることから、二条東院に住まわせられたと推定されるが、彼女が表象する東という方位も二条東院に置かれるにふさわしいものとして機能したであろう。と同時に、末摘花は北という方位も表象している。彼女が二条東院の北の対に配置されたのは、彼女が表象するもう一つの方位、北によつたと考えることができよう。なお、末摘花は末摘花巻に登場した時点で、その容貌が醜いとされるが、二条院・二条東院空間において、二条東院の北の対は二条院・二条東院空間の北東に位置する。邸の北東は鬼門であり、悪霊等の進入を防ぐためには、醜い末摘花が二条院・二条東院空間の北東の位置に配される必要があつたのではないだろうか。^注

花散里の住むのは二条東院の西の対であるが、二条院と二条東院を合わせて考えると、花散里の住む二条東院の西の対は二条院と二条東院のほぼ中央ということになる。しかも、二条東院には北の対がある。この北の対との関係で考えれば、花散里の住む二条東院の西の対は南に位置することになる。先に述べたように、花散里は南という方位を表象すると考えられるが、彼女が住まうことになった二条東院の西の対は、二条院と二条東院を合わせた空間の南の位置に当たり、彼女の表象する南という方位と一致する。

すなわち、二条院・二条東院空間は、東に西、秋を表象する明石の君、西に東、春を表象する紫の上、南に南、

夏を表象する花散里、北に東、北、冬を表象する末摘花が住むというように、四方、四季を表象する女性たちによって構成される空間を構築することを企図して構想されたと考えられる。

*

さて、これまでの考察から、紫の上が春、東を表象し、明石の君が西、秋を表象することが確認されたが、それと同時に先に指摘したように、東と西の水平軸、山と海の垂直軸の二元による国土支配という枠組みにおいては、紫の上と末摘花は東、山、仏という属性を有し、明石の君は西、海、神という属性を有しており、紫の上は東、明石の君は西という方位を表象していた。^{注12}しかし、二条院・二条東院空間における女性達の配置を見ると、東という方位を表象する紫の上が二条院の西の対、すなわち二条院・二条東院空間の西の端に住み、西という方位を表象する明石の君が二条東院の東の対、つまり二条院・二条東院空間においてこの二人が配置される場所に住むことになり、紫の上が東を表象し、明石の君が西を表象するならば、紫の上は二条院・二条東院空間の東、すなわち二条東院の東の対に住み、明石の君は二条院・二条東院空間の西、すなわち二条院の西の対に住むというのが最も自然な配置と考えられる。にもかかわらず、物語作者は、なぜそのような配置を取らなかったのでしょうか。

まず最初に考えられる理由は、二条院・二条東院空間の東北は鬼門にあたることから、そこに醜い容貌を持つ末摘花を配し、二条院・二条東院空間全体を護る必要があったということである。末摘花を二条院・二条東院空間の東北に配するには、末摘花の住む邸を二条院・二条東院空間の東側に配置する必要がある。が先に述べたように、源氏と紫の上だけを一つの邸に住ませようとすると、末摘花が住む邸はそれとは別の建物となり、そこには明石

の君や花散里も住むことになる。そのことから明石の君、花散里、末摘花等が住む邸は源氏と紫の上が住む二条院とは別の邸で、かつその邸は二条院の東に造営されることが必要となる。このような理由から明石の君、花散里、末摘花等が住む邸は二条院の東に建てられたのではないだろうか。

二条院の東に二条東院を造営し、その北の対に末摘花を住ませれば、二条院・二条東院空間の東北、鬼門にあたる位置に醜い末摘花を配置しすることが可能となり、二条院・二条東院空間の安全性は確保される。次いで、二条東院の東の対と西の対のどちらかに、明石の君を入れ、もう一方の対に花散里を入居させれば、二条東院の主要な殿舎に入る女性の配置が確定できる。二条東院の西の対は、二条東院のみで考えると、二条東院の西の端ということになるが、二条院・二条東院空間全体から見ると中央に位置し、二条東院の北の対と南北の関係を形成している。二条東院の東の対も二条東院の北の対の南に位置しているが、二条院・二条東院空間全体で見ると、二条東院の西の対が二条院・二条東院空間の中央に位置するのに対し、東の対は東の端に位置し、二条東院の北の対に對する南としては、二条東院の西の対がふさわしい。こうした点から、二条東院の西の対には南、夏を表象する花散里が入り、その結果東の対に明石の君が入居させられることになったのであろう。

二条院の傍らにもう一つ邸を建て、二条院と新築した邸を合わせた空間の鬼門にあたる東北に末摘花を配置するとすると、新しい邸は二条院の東に建てるしかない。また、源氏と紫の上の愛を絶対とするためには、その新しい邸に、末摘花の他に明石の君、花散里といった女性たちを住ませなければならず、二条院の東の邸、二条東院には、北の対に末摘花を住ませるとともに、西の対に南を表象する花散里、東の対に西を表象する明石の君を住ませなければならぬ。二条東院の東の対に西を表象する明石の君が入居するとすると、二条院の東の対よりも西

の対に東を表象する紫の上が住ませる方が、二条院・二条東院空間の東と西の端に、西と東を表象する女性が位置しバランスのよい配置が形成されることになる。つまり、二条院・二条東院空間の東北に末摘花を配置しなければならぬと事情から、必然的に二条院・二条東院空間の東に西を表象する明石の君、西に東を表象する紫の上が配置されるということになったのではなからうか。

また、二条院・二条東院空間の東の端である二条東院の東の対に西を表象する明石の君、西の端である二条院の西の対に東を表象する紫の上が入居することについては次のように考えることも可能であろう。

もし二条院・二条東院空間の東の位置に紫の上を住まわせたとなると、紫の上が位置する東という方位と紫の上が表象する東という属性が合致するのみならず、紫の上が表象する東、山、仏という属性が東という方位に賦与されることになる。また、二条院・二条東院空間の西に明石の君を住まわせたとなると、明石の君が配置された西という方位と明石の君が表象する西という属性が合致し、明石の君が表象する西、海、神という属性が西という方位に与えられることになる。東と西という方位に、それぞれの方位を表象する人物を配置すれば、東という方位に東、山、仏という属性が賦与され、西という方位に西、海、神という属性が賦与されることとなり、その結果、東、山、仏という空間と西、海、神という空間が、それぞれ独立した空間として二条院・二条東院空間の東と西に別個に創出されることになる。もちろん、このようにして創成された空間も絶対的な王者の住まう空間としてふさわしいもの捉えることができよう。

しかし、このように東と西でそれぞれ独立して存在する空間よりも、東と西を入れ替えることで、融合、調和するより包括的な空間を創造する方が、あまねく全土を統治する王者光源氏にふさわしい空間を創出できるのでな

いだろうか。物語作者は二条院・二条東院空間の東と西を入れ替えることで、より包括的な空間を創出することを企図したのではなからうか。紫の上を二条院・二条東院の空間の西にあたる二条院の西の対に配せば、西という方位に紫の上が表象する東、山、仏という属性を賦与することが可能となる。また、明石の君を二条院・二条東院の東にあたる二条東院の東の対に配せば、東という方位に明石の君が表象する西、海、神という属性を付け加えることができる。物語作者は、二条院、二条東院を合わせた空間の東側に西、海、神を表象する明石の君を据え、西側に東、山、仏を表象する紫の上を住まわせることで、二条院・二条東院空間の東の空間、つまり二条東院に東・西、海、神という属性を与え、西の空間、つまり二条院に東・西、山、仏という属性を賦与することで、二条院・二条東院空間全体に東と西、山と海、仏と神が融合した一つの空間を生成することを意図したのではなからうか。

しかも、二条院の西の対に住む紫の上のもとには、源氏と明石の君の間に生まれた明石の姫君が養女として迎え入れられる。明石の姫君は明石の君の娘であるから、当然のことながら西、海、神という属性を有しており、明石の姫君を二条院の西の対に迎え入れることで、二条院・二条東院空間の西側にある二条院は、東・西、山・海、仏・神といった属性をあまねく備えた空間として機能する。(この場合、紫の上がトヨタマビメとなり、海、神の属性を持つようになると解することも可能であろうが、その場合紫の上に西という属性を与えられるかどうかは難しい問題である) また、明石の君が住む二条東院には、北の対に末摘花が住んでいる。末摘花は、既に拙論で指摘したように、紫の上がコノハナサクヤビメに比定されるのに対し、イワナガヒメに比定され、かつ末摘花巻および生巻の描写より、紫の上同様、東、山、仏を表象している。^{注13}従って二条東院に末摘花を居住させるということは、二条東院が東・西、海、神という属性の他に、末摘花が表象する東、山、仏といった属性を有する空間であることを

示すことになる。このように東、山、仏を表象する紫の上と西、海、神を表象する明石の姫君を二条院・二条東院空間の西に配置し、西、海、神を表象する明石の君と東、山、仏を表象する末摘花を二条院・二条東院空間の東に配すると、東と西、山と海、仏と神という属性が混じり合って、二条院・二条東院空間は東・西、山・海、仏・神という属性があまねく存在する空間となる。

さらに、二条院の寝殿には、秋好中宮が入居し、二条東院の寝殿には玉鬘が迎え入れられる。秋好中宮は伊勢の齋宮であったことから、東、海、神という属性を有し、玉鬘は九州で育ち、長谷観音の利益によって源氏の邸に引き取られることから、西、山、仏という属性を持つと考えられる。二条院に住む紫の上の東、山、仏、そこに迎え入れられる明石の姫君の西、海、神という属性に、東、海、神という属性を持つ秋好中宮が加わり、二条東院に住む明石の君の西、海、神、末摘花の東、山、仏という属性に、玉鬘の西、山、仏という属性が加わると、二条院、二条東院それぞれの空間はさらに東・西、山・海、仏・神という属性が融合し、全体として東・西、山・海、仏・神という属性があまねく存在する空間となり、国土全域を支配する絶対的な王者光源氏にふさわしい相貌を呈することになる。

仮に先に想定したように、二条院・二条東院空間の東側に紫の上、西側に明石の君を住ませた場合、明石の姫君を紫の上のもとに移し、末摘花を明石の君の住む西側の領域に配し、秋好中宮を二条院・二条東院空間の東側、玉鬘を二条院・二条東院空間の西側に位置せしめたとしても、紫の上を二条院・二条東院空間の西、明石の君を二条院・二条東院空間の東に位置せしめる空間ほど東・西、山・海、仏・神という属性が融合する空間は形象しえないであろう。紫の上が東、明石の君が西という配置では、東という方位と東、山、仏という属性、西という方位と

西、海、神という属性の結びつきがあまりにも強固で、明石の姫君と末摘花の交換、秋好中宮と玉鬘の入居といった程度の調整では、東の空間と西の空間それぞれが持つ自立性を突き崩すことはできず、紫の上を二条院・二条東院空間の西、明石の君を二条院・二条東院空間の東に位置せしめた空間のような、様々な属性が融合した空間は創出しえないであろう。^{注14}

二条院の東に二条東院を建てることによって、二条院・二条東院空間の鬼門にあたる東北の方角に醜い末摘花を配置し、邪悪なものへの侵入を防ぐことが可能となること、また二条院・二条東院空間の西の方位に、東、山、仏を表象する紫の上、東の方位に西、海、神を表象する明石の君を住ませ、それぞれの女性が表象する方位と居住する空間の方位を入れ替えることによって、二条院、二条東院空間全体が初めて東・西、山・海、仏・神といった属性をあまねく備えた空間となることを併せ考慮して、物語作者は二条東院を構想したと考えられる。

注

- 1 『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』に拠る。
- 2 神野藤昭夫は「『花散里』巻をどう読むか」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識 花散里』所収）で、源氏が中川の女に拒絶された場面に ついて「新たな男がいるかもしれないのだからという配慮よりも、女の拒否にあうことによって、むやみに女に声をかけたりするべきでない現在の身の上ではないことを、あらためて再認識しているのではないのか。微行からはずれた振る舞いであったということになる。女の拒否を通して、光源氏は、世間というものを感じ取って、それ以上の振る舞いに出ることを踏みとどまるのである」と指摘する。
- 3 拙著『王朝文学の始発』（平成27年、笠間書院）第四章、第一節「『源氏物語』と『古事記』日向神話―潜在王権の基軸―」
- 4 森一郎『源氏物語の方法』（昭和44年、桜楓社）五「二条東院造営―『思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば』（瀟標卷）をめぐる―」、伊井春樹『源氏物語論考』（昭和56年、風間書房）第一章、第四節「五節と花散里の登場の意義―『おもふさまにかしづき給ふべき人』（瀟標卷）の構想と二条院から六条院造営への展開について」

- 5 伊井春樹『源氏物語論考』（昭和56年、風間書房）第一章、第四節「五節と花散里の登場の意義―「おもふさまにかしづき給ふべき人」（遷標巻）の構想と二条院から六条院造宮への展開について」
- 6 深沢三千男『源氏物語の形成』（昭和47年、桜楓社）第一編 第五章「王者のみやび―二条東院から六条院へ（続光源氏の運命）」、伊井春樹『源氏物語論考』（昭和56年、風間書房）第一章、第四節「五節と花散里の登場の意義―「おもふさまにかしづき給ふべき人」（遷標巻）の構想と二条院から六条院造宮への展開について」、日向一雅『源氏物語の主題 家の遺志と宿世の物語の構造』（昭和58年、桜楓社）「六条院世界の成立について―光源氏の王権性をめぐって―」
- 7 深沢三千男『源氏物語の形成』（昭和47年、桜楓社）第一編、第五章「王者のみやび―二条東院から六条院へ（続光源氏の運命）」
- 8 日向一雅『源氏物語の主題 家の遺志と宿世の物語の構造』（昭和58年、桜楓社）「六条院世界の成立について―光源氏の王権性をめぐって―」
- 9 同注3
- 10 同注3
- 11 林田孝和は『源氏物語の精神史研究』（平成5年、桜楓社）第二編、第六章「源氏物語の醜女」で、「源氏物語」の女主人公に、未摘花・花散里という源氏の愛妾としては不似合いの醜女を二人もとうじょうさせたのも、醜に異常な靈力を観じる原義があるからではなからうか。結論からいえば、物語作者が醜貌に異常な靈力―魔除けの力を認めたくえて登場させたのではあるまいか。
- 12 醜怪な顔には、魔除けの靈能があると古くから信じられている。王朝貴族の誕生儀礼の一つである御湯殿始の儀に際して、産湯に映したり漬けたりする虎の頭・犀角はいうまでもなく、家屋の棟にあげる鬼瓦や床飾りの般若面・天狗面などその端的な例である。鬼瓦は外部から魔性のものが侵入するのを防ぐもので、できるかぎり醜怪なものをあげるのが「原義に適う」と指摘する。
- 13 同注3
- 14 二条院の西の対に紫の上、二条東院の東の対に明石の君を配置した場合、二条院 二条東院の属性のあり方を示すと次のようになる。

東	東・山・仏（未摘花）
西	西・山・仏（玉鬘）
東	東・海・神（秋好中宮）
西	西・海・神（明石の姫君）

それに対し、二条院の西の対に明石の君、二条東院の東の対に紫の上を配置した場合

東	東・山・仏（紫の上）	西・海・神（明石の姫君）
西	西・海・神（明石の君）	東・海・神（秋好中宮）
		西・山・仏（玉鬘）
		東・山・仏（末摘花）

となる。

* 「二条東院構想試論（下）」は、『白百合女子大学 言語・文学研究センター―言語・文学研究論集』16号に掲載する。